
六番めの善鬼

森野青果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六番めの善鬼

【Zコード】

N1464Z

【作者名】

森野青果

【あらすじ】

見た目は美少年だが、三百年ほど生きた老魔法使いのぼく。全盛期には王国を滅ぼしかけたけれど、さすがに最近は魔力の衰えを感じ始めている。長年連れ添つた五匹の使鬼たち（見た目は美女・美女揃い）も反抗的になってくる。そんなある日、使鬼たちを解き放たなければ、いよいよ命が危ないと告げられる。しかも彼女らは契約を解除されたとたん、長年こき使われた恨みを晴らすため、ぼくに襲いかかるだろう。五匹とも使鬼としてのレベルは最強だ。そこでぼくは、六番めの使鬼と契約を結ぶことにした……

ザ・ザの小砂漠を半分わたつたところで、月が一つあらわれた。ぼくはガルシアを止めて、斜め前方に起立する岩の上へ目をこらした。蜜蟻酒は好物だが、今夜は一滴も飲んでいない。なのに何度も目をしばたかせて、月は一つあるようにしか見えなかつた。宫廷の博士どもがこれを見たら、世界の終わりだのアル・ル・タジール王国の破滅だと、大騒ぎしたに違ひない。

もつとよく見るために、ガルシアから下りて、さうに数歩あゆみ寄つた。

風がぱたりと止んでおり、マントは少しもはためかない。空気は澄んでいて、星が瞬くさまがよくわかる。こんな夜なら、あのいやらしい砂蟹どもが這い寄ってきたとしても、気配でわかるだらう。ぼくだって、一晩かけて骨にされるのは「めんどだ」。

眺めているうちに、月の一つが瞬きした。

「円眼鬼か」

そんなことだらうと思つた。どこの誰かは知らないが、趣味のよくない術者が放つた使鬼ではないか。

もちろん円眼鬼がザコだというつもりはない。こいつを使いこなす術者は、かなり強力なミツの持ち主でなければならない。とはいいうものの、

(趣味がよくないんだよね。古代語を使えば、スタイリッシュやじやないってことだ)

あんなじつじつした化け物と、自身のミツを回調わせるやつの氣が知れない。

円眼鬼は筋肉隆々・フンドシ一丁の巨人で、つるんとした頭部のつぶんから、フイン族みたいな辯髪をたらし、鼻も口もない顔の

真ん中に、巨大な真円形の眼をそなえている。ばかでかい斧を所持しており、五マリートくらいの歯ならば、一撃で打ち碎く。
(まったく、趣味がよくないんだよね)

溜め息をついた。

ちなみにぼくが命を狙われる理由なら、星の数ほどある。三百年ほど生きてきたが、悪行三昧の人生であった。もともと、最近はさすがにミワの衰えを感じて、ずいぶんおとなしくしているが。全盛期には、アル・ル・タジール王国を滅亡寸前まで追いこんだこともある。

「トシはとりたくないものだな」

自慢じゃないが、見た目は若い。花も恥らう紅顔の美少年。そのじつ、厚顔無恥な老魔法使いなのだけど。

再び月が瞬いた。やれやれとつぶやきながら、ぼくは左手の指を伸ばし、手の甲を面前にかざした。五本の指には、それぞれ五色の石をあつらえた指輪が嵌まっている。親指から始めて、黄、赤、紫、青、緑……痛みを覚えたように、ぼくは眉をひそめた。

めまいがする。

いよいよミワが使鬼の靈力に、耐えきれなくなっている証拠だ。こんなことなら、剣術使いの護衛でも雇つておくべきだったが、筋肉隆々・フンドシ一丁の刺客を前にして、今さら悔やんだところでは始まらない。ぼくは右手の人さし指に中指を添えて、指輪の一つに触れた。刺すような痛みとともに、黄金色の火花が散った。

「アール・ミーム・ミール・ワーフ。偉大なる夜の支配者。暗黒の王の御名において、我は望み、我は求む。炎と血の精霊、サラマンドルの眷属。ミランダをここに召還せんことを」

指輪が灼熱し、閃光が弾けた。

紅蓮の炎が噴出し、中空で渦を巻いた。

炎はのたうちながら蛇と化し、トカゲと化し、やがてほつそりとした一人の女の姿を描いた。腰まで届く真紅の髪。額と首と左腕に巻かれた黄金の飾り輪。美しい体の線もあらわな赤いドレス。その

スリットから、ほつそりとした脚を覗かせている。

ミランダは左手を軽く腰にあて、右手に炎の剣を引つさげて、中空から青い瞳でぼくを見下ろした。

「あそこにはいるの、円眼鬼でしょ。いやよ、わたし。フンドシ野郎の相手なんて」

ミロが弱ると、使鬼もやたらと反抗的になつてこまる。全盛期にはすいぶんいたぶつて、いや、可愛がつてやつたものなのに。

「余計な口をきくな。おまえは黙つて命令に従えればいいんだ」「あんたこそ、だれに向かつて口をきいてるつもりなの、ビア樽」「お仕置きされたいのか」

「ふん」

鼻で笑いやがつた。ちなみにビア樽のことを、タジール公領の方言で「フォルスタッフ」と呼ぶ。これがすなわち、ぼくの名である。ミランダが剣を振り上げ、軽く振り下ろすと、刀身の炎がほとばしり、一匹の大蛇と化して突き進んだ。こちらへ向かつて、だ。ぼくは素早く水冷の呪文を唱え、マントをひるがえした。

眉毛が少し焦げた。もう少し対応が遅れたら、美少年の丸焼きが湯気をたてていたところだ。

「殺す気か！」

と叫んだものの、我ながら愚問だった。今の一撃は勢いこそ弱かつたが、完全にぼくをロツクオンしていた。要するに、殺る気満々。さてこつなると厄介だ。今夜の彼女はことさら機嫌がわるいし、ぼくのミワも予想以上に弱まっている。ミワが弱まれば、使鬼を束缚する力も減少する。大魔法使いだなんてうそぶいているが、じよせんは生身の体。使鬼とタイマン張つたところで、勝ち目なんかあるわけがない。

（ヘレナを呼び出すか……）

薬指に嵌まっている青い指輪を横目で眺めた。

五匹の中では最も温厚なヘレナだが、血も涙もない悪鬼であることに変わりはない。ミワによつて拘束されていればこそ、命令を聞くわけで、こんな状態で呼び出せば、ミランダとタッグを組んで襲つてくる可能性が高い。いや、ぜつたに襲つてくる。

そんなぼくの窮地を救つたのは、意外にも円眼鬼だつた。

「後ろだ、ミランダ！」

ミマリー一トはゆつに越える巨体が大斧を振り上げ、団体からは信じがたい素早さで、彼女の背後にせまっていた。真円形の一つ目が、呪われた鏡のようにぎらぎらと輝いた。

「言われなくたって！」

彼女は振り返りざま、炎の剣をひと薙ぎした。閃光が巨人の胴を直撃した。爆音とともに炎が渦を巻き、円眼鬼はおぞましい悲鳴を上げながら、後方に吹き飛ばされた。そのまま背中で巨岩に突っ込み、ばらばらに打ち碎いた。

澄みきつた夜空の下、ミランダは踊るように身をひるがえした。赤く発光する髪がなびき、緋色のドレスから、白い脚があらわになつた。生意気なやつだし、さつきは殺されかけたが、じつに美しい。使鬼というものは、こりでなくてはいけない。

「仕留めたか」

「冗談でしょう。相手が何だと思つてるの？ そんなことも感知できなくなつたんじゃ、あんたもそろそろおしまいね、フォルスタッフ」

「い、主人さまだらう！」

痴話喧嘩している間に、崩れた大岩の塊が四方へ弾け飛んだ。ラマ王の彫像のように円眼鬼が立ち上がり、雄叫びを上げた。さつきの一撃で腹がざくりと裂け、傷口から蒼い炎が吹き出していた。片手で斧を引きずりながら、よろよろと歩き、一つ目に憎悪をみなぎらせた。

ミランダの瞳に、世にも高慢な侮蔑の色が宿るのを見た。使鬼は飼い主に似るといつコトワザは、あながち嘘ではない。彼女は優雅に腕を振り上げ、片膝を立てた。いにしえの女神像をおもわせる、「終撃」の構え。

野獣の咆哮にも似た雄叫びを上げながら、円眼鬼は地を蹴つて駆けだし、宙に踊り上がった。見る間に距離が縮まつたが、ミランダは微動だにしない。巨人は背後になびいた大斧を片手で引き寄せるようにして、水平に切りつけた。

血の色をした炎が、夜空で弾けた。

次の瞬間、炎に包まれた円眼鬼の上半身が、ぐるぐると回りながらはるか彼方へ飛んで行くのを見た。残りの半分がどうなったか、知るよしもない。ひとつだけわかっているのは、円眼鬼を送りこんだ術者が、今ごろ苦しみのたうちながら、あの世への旅路を急いでいるだらうこと。

使鬼の敗北は、即座に術者の死を意味する。相手を抹殺するために送りこんだ力が、すべて自身に跳ね返つてくるからだ。

月は一つになっていた。さつきより数倍に膨らんだように思える、巨大な満月。その前にたたずんで、ミランダはぼくを見下ろしたまま、赤い唇にすさまじい笑みを浮べた。

「思い知らせてあげましようか、フォルスタッフ。どちらがご主人さまなのか」

ル・ビヨン。首都アル・ブリスに次ぐ、王国第一の都市。荒野に横たわる双子の竜、ロム川とレム川が街の中で合流し、また二つに分かれてゆく。瘦せて神経質な姉妹。氾濫をくり返すお転婆な竜たちも、絡みあうことで力が相殺され、広く穏やかな流れと化している。

その豊富で清らかな水を利用して、広大なオアシス都市が築かれている。王国が誕生する以前から街として栄え、またかつて、ここに百年にわたって大富司が幽閉されていたことで知られる。そのせいか、神社仏閣が非情に多く、なぜか魔術師が好んで住みたがる。ル・ビヨンの場末といえば、カンテラ通りが南で尽きるあたり。ズ・シ横丁と呼ばれ、じめじめした土地に蜘蛛の巣のような路地があり組み、あやしげな貧民、遊び人、悪人どもが巢食っている。この騒がしいスマラム街をぼくは気に入り、ここ五年ばかり、ねぐらにしている。近所の連中はぼくのことを、ただのインチキ占い師と認識しているようだが。

「よお、フォルスタッフ。今夜はまた、いつそう冴えない顔をしているな」

青猫亭に入ると、ヒゲ達磨の亭主が目をとく見つけてそう言った。「悩み事があるんなら、占つてやろうか、先生」

店にひしめく醉客たちが、どつと笑う。ぼくは眉をひそめ、無言で隅のテーブルをめざした。硬い椅子に腰をおろしたとたん、背骨が引き裂かれるような痛みにみまわれた。

(くつ……!)

昨夜はあやうく死にかけた。

さいわいミランダは円眼鬼との戦闘で、彼女の思惑以上に力を使

つていたため、どうにかこうか、指輪に押し籠めることができたのだが。おかげでぼくは、一皿じゅうべッドから起き上がれず、夜になつてようやくねぐらを這い出し、腹を空かしてズ・シ横丁をさまよい歩く恰好。

「ほんとうに、だいじょぶなんですか」

酒壺と料理を手に、ロザリオが近づいてきた。三つ編みにした、燃えるような赤毛を見て、ぼくは痛みを思い出したような顔をしたに違いない。もっともロザリオはミランダの五百倍温厚で、慎み深い。あのヒゲ達磨から、こんな娘が生まれたこと自体、奇跡といえた。

ぼくが飲み食いするものはいつも同じなので、注文なしで運び込まれる。常に特上の酒をたのみ、払いもいいので、だいたいこの時間には、ぼくのために隅の席が空けてある。

「「めんなさいね。父はああ見えて、フォルスタッフさんのこと、気にかけているんですよ。ここ最近、ずっとつらそうに見えるつて。わたしも、とても心配です」

ヒゲ達磨が気にしてくるのは、ぼくの財布のほうだらつ。そういうふたが、もちろん口にしなかった。

「ありがとう。きみの顔を見たら元気が出たよ」

歯の浮くようなセリフを言つと、ロザリオは花が咲いたように、頬を赤らめた。

この娘を陥落させるのはた易い。奴隸にしてみたい気がしないでもないが、それではここに来る楽しみがなくなつてしまつ。五十年前なら、迷わず鎖で引き回す楽しみを選んだのだが。純真なまま眺めていたいといつのは、まさに親爺趣味。ぼくもトシをとつた証拠であろう。

ロザリオが立ち去ると、ぼくは切子硝子の容器に酒を注ぎ、パンをちぎつて煮豆のスープにひたした。食えないことはないけれど、基本的に肉は食わない。美酒と粗食が、ぼく流の長生きの秘訣である。一人で静かに食事する習慣を知っているので、ガラのよくない

常連客たちも、この席には近づかない。

ぼくの食事を邪魔だしてしたヨソ者が痛いめにあつ場面を、何度も田の辺たりにしているからだ。

食事を終えるとロザリオが空の器を下げる、薔薇茶を置いていった。一口飲んだところで、テーブルの上に影がさした。

見上げると、つぎはぎだらけの防水布で全身を覆った人物が、ぬつと立っていた。こちらのほうが影法師みたいだつた。長身で針のように痩せていた。フードの中の顔は濃い影がべつたりと貼りついでいるため、よくわからない。ただ鋭い眼光と、食み出した蓬髪だけが、影の中にいちじるしかつた。

ぼくが驚いたのは、この男がまったく気配を感じさせず、ここまで近づいたことだ。

「ほかに席がなかつたんですね。ここ、空いてるかね」

目の前の椅子を指さして、男はかすかに笑つたようだ。あれほど騒がしかつた酒場は、一瞬で静まり返り、まわりの連中が、固唾を呑んで見守つているのがわかつた。男を睨みつけたまま、ぼくは答えた。

「もちろん」

「ならば、座らせてもうつよ。ずいぶん長いこと歩いてきたものでね

男の声に聞き覚えがあることに、ぼくはとっくに気づいていた。だがどうしても思い出せない。血邊じゃないが、記憶力はあまりよいほうではない。

自分で言つたとおり、この男が旅を続けてきたことは、間違いないだろう。腰かけるときには、荒野のにおいて、血のにおいが少しした。相変わらずフードを取りぬまま、ミイラのように防水布を巻いた指を、テーブルの上で組み合わせた。なんという眼光だろう。このぼくが、生身の人間に恐れを感じるなんて。

「あの……」

胸に盆を抱いた姿勢で、ロザリオは蒼ざめていた。ぼくは彼女にウインクしてみせた。びっしょり冷や汗をかいていても、カッコだけはつけたい。

「いいんだよ。ぼくと同じものをお出しして。それとも、肉がよろしかったでしょうか？」

「いや、同じものだけつこうだよ。フォルスタッフさん」
ボロ布を巻いた片手をあげた。ロザリオが逃げるよう立ち去ると、常連たちはホッとしたような、がっかりしたような溜め息をもらして、それぞれの雑談に戻つていった。なんだ知り合いか、といったところだらう。

男はたしかに、ぼくの名を「フォルスタッフ」と呼んだ。

「何年ぶりでしようか」

カマをかけてみた。酒と料理が運ばれ、心配顔のロザリオが再び立ち去るまで、男は無言で指を組み合わせていた。砂漠のような声で、男は答えた。

「およそ百三十年ぶりかな。昔の話だ。忘れてしまつのも、無理はない」

男は酒壺の栓を開け、そのまま口をつけて傾けた。本当にミイラ

ではないかと疑いかけていたが、一応飲み食いするらしい。百二十九年前といえば、ぼくが最も羽振りのよかつた時代だ。

魔軍を率い、当時のタジール公と手を結んで、強大な王国軍を次々と蹴散らしていった。王宮を包囲して五十日後、あることがきっかけで、突然気が変わるまで。

（ここに至つて包囲を解くというのか。愚かな。もし汝がそれを欲するなら、我は汝のもとを離れ、必ず汝を滅ぼすであろう）

あのときの、憎悪に燃えるヴィオラの顔が、目に浮かぶようだ。紫の指輪に封印されている、五匹の中でも最強の力をもつ使鬼。ついに彼女は反乱を断念したが、ぼくもまたあれ以来、一度もヴィオラを呼び出していない。右手の中指に嵌められた紫のリングは、いわば「開かずの指輪」と化していた。

「思い出したかね」

「いや」

なぜ男を思い出そうとして、ヴィオラの姿が浮かんだのだ。乾いた笑い声をもらすと、男は両手を上げてフードにかけた。ゆっくりと後ろにずりされた黒頭巾の中から、まず白い蓬髪がばさばさと食み出した。面長な、これ以上ないほど痩せた顔。白い苔のような無精ひげ。尖った鼻と険しい眉間。幾筋もの傷が走る蒼黒い顔の中で、目だけが鉱物のように輝いていた。

「ダーゲルド……！」

声が震えた。ダーゲルド・オーシノウ。かつてのぼくの師であり、敵でもあつた男。百三十年前に死んだとばかり思っていたのに……。そう、彼女によつて、かれは殺されたのではなかつたか。もとはダーゲルドの使鬼であつた、ヴィオラによつて。

ダーゲルドのもとで、ヴィオラはシザーリオと呼ばれていた。少年の扮装をして、戦闘時にのみ呼び出されるのではなく、平時もかれの召使のように仕えていた。

「生きていたのですか？」

むろん、目の前の男が幽鬼でも生ける屍でもないことは、わかっ

ている。他人の空似でもない。かつての洒落者が、ボロ屑のようにやつれ果ててはいるが、こんな目をした男が、二人といふ筈がない。そうしてかれがダーゲルドに違いないことは、次の二言で明らかになつた。

「シザーリオは元氣かね」

「あいにくと。あれから一度も呼び出していませんよ」

「だが、近いうちに、いやでも顔を合わせねばならんだらう」

「何が言いたいんです？」

かれは答えず、また酒壺を傾けた。煮豆のスープはまったく手がつけられないまま、テーブルの上ですっかり冷めていた。あらかた空になつた壺を置き、指で口をぬぐつた。ボロ布にどす黒い血がにじむのを、ぼくは見逃さなかつた。

ヴィオラを紫の指輪に封印してしまってから、ぼくは彼女の夢を頻繁に見た。

夢の中の彼女は、必ずしもぼくを責めてはいなかつた。けれどもそれは、ぼくの願望に過ぎなかつたのかかもしれない。

(まだぼくを憎んでいるのか)

(我に汝を憎む理由はない)

(ミワから解き放たれなくないのか。自由になりたくないのか)

(自由など、しょせん幻想に過ぎぬ。人は鳥の翼に憧れるが、鳥は翼を得たばかりに、休む間もなく世界じゅうをさまよう宿命を、背負わねばならなかつた)

(まだダーゲルドを愛しているのか)

(……)

(だからぼくを、許すつもりはないのだひつ。答えてくれ、ヴィオラ)

(私は使鬼なるぞ。それが答えるだ)

かれが席を立つ気配で、ようやく我に返つた。

「どこへ？」

「少し外が見たい。この街は、久しづりだ」

二人ぶんの勘定を払い、青猫亭を出ると、ダーゲルドは店の前にたたずんでいた。フードつきのマントが、重々しい影を引きずつていた。

人は死期が近づくと影が薄くなるというが、魔術師の場合は、その逆であるらしい。影の存在がだんだん強くなり、ついにはそいつに呑まれてしまう。人の道に外れた技。神というのか何というのか知らないが、光り輝く存在に背を向け、ひたすら闇の力に頼つてき

た、その報いなのだろう。

ぼくもまた、近頃では明るい月夜など、自身の影を見てぎょっとすることがあった。そいつは見知らぬ生きもののように、いつかぼくというクビキを逃れて、復讐を果たす日を虎視眈々と狙っているのだった。五匹の使鬼たちの意志を、代弁するかのようだ。

「ほお、ブリキの自走夜警が、まだいるんだな」

いつしか、かれと肩を並べて、淋しい通りを歩いていた。

両側の貧家の窓から、頼りない灯りが洩れているばかりだが、欠けはじめた月の影が落ちて、街路を蒼白く浮かび上がらせていた。かん、からん、と、うつろな音を響かせながら、不恰好な影が近づいて来た。ダーゲルドは、この影のことを見つたのだ。

それは古めかしい夜警の制服を着せられた、ブリキのゴーレムだった。中に機械仕掛けもなければ、人が入っているわけでもない。まったくのうつろだという。むかし、幽閉されていた大宮司を監視するために、何十体も作られ、強力な魔法によって動いていたという。

「たまに見かけますね。もはや幽靈を見たほどにも、気にかける住人はいませんよ。どこから来てどこへ行くのか。日が落ちると同時に、ふらふらとさまよい出て、クロック鳥が鳴く頃には、いつの間にか消えちまいります」

かん、からん。

やや前屈みの姿勢で、自走夜警はぼくたちとすれ違い、右に左によろめきながら、街路の角を曲がって消えた。

ぼくたちはどんどん街外れまで歩き、丘をのぼる小道にさしかかつた。月が丘を照らし、奇妙な巨獣のように見せていた。実際に、かつてこの丘には、びっしりと牙の生えた口で常にニヤニヤ笑いしている巨獣が棲み、人をさらって食っていたとか。今では頂上に、古代神殿の廃墟が残るばかりである。

倒れた石柱に、ダーゲルドは腰をおろした。いかにも疲れきったかれは、今にも自身のマントに押しつぶされそうだった。ぼくは突

つ立つたまま、円とダーゲルドと向かい合つ恰好。

「長生きなんか、するもんじゃない。生命力の強さか、それとも悪運といつやつか。いずれにせよ、老齢をむかす恰好となつた」

「あなたのミツは、まだ充分強力ですよ」

「氣休めはいい。おのれのミツのことば、おのれが一番よくわかっている。指輪をすべて抜き取つても、このザマだからな。シザーリオが封印されたままでよかつたよ、フォルスタッフ。彼女には……こんな姿を見せたくなかつた。

といづ言葉を、きつとかれは飲み込んだに違ひない。

「ときにはオルスタッフ、わたしの心配なら、よそでしてくれて構わないが、おまえ自身はどうなのだ？ どこまで理解している？」
知らずに肩が震えた。やはりダーゲルドは、そのことを告げるために、はるばる荒地をわたってきたのだ。とくの昔に死んだはずの男が、黒いフードつきのマントを身につけた、骸骨のようは風貌で。

月が痛いほど冴えていた。

不眠症の町、ズ・シ横丁の喧騒も、ここまでは届かない。神殿の下に埋められているといつ、長い耳の巨獸が、含み笑いする気配まで感じられるようだ。

「昨夜は、火のじゃじゃ馬に食われかけましたよ。円眼鬼を屠ったばかりの彼女に、です」

「おまえが悪態をついている娘に、せいぜい感謝することだ」

ミランダが、手加減してくれたというのか。円眼鬼の先制攻撃をぼくが指摘した、その借りを返したつもりか。

「だが次こそは、その減らず口ごと消し飛んでしまつと考えたほうがいい。長年の不擇生の報いだよ、オルスタッフ。おまえのミワは、もはや一匹の悪鬼の靈力にすら耐えられない」

溜め息がもれた。おのれのミワのことは、おのれが一番わかつている。ダーゲルドはそう言つたが、ぼくもまた心の奥底では、そのことを充分理解していたのだと思う。ただ認めたくなかっただけで。「次に使鬼を呼び出したときが、ぼくの最期だと？」

「そういうことだ」

「ヘレナでもダメですか」

「何とも言えないな。場合によつてはシザーリオ……ヴィオラがおまえを見逃すかもしない……ああ、いや。それはあり得ないか」

あり得ないと、ぼくも思つ。

(我は使鬼なるぞ)

それが答えだと呟いたとおり、彼女は使鬼の「撻」に忠実に従うだろう。ミワから解放された使鬼は、元の主人と対決しなければならない。彼女たちが靈力というエナジーの塊である以上、クビキを解かれた後の反動は自然な流れであり、算術博士どもが呟つたりの、「法則」に過ぎないのだから。

だからと言って、むりに彼女たちを引き留めようとするほど、事態は悪化の一途をたどるだろう。反動が膨れるだけ膨れ上がり、共鳴作用がはたらいて、やがては五匹とも封印を突き破り、同時に襲いかかってくるだろう。

一匹ずつでも打つ手がないというのに、いつなってはお手上げだ。もはや恥も外聞もなかつた。かつての敵の前に、ぼくはすがるよつに、ひざました。

「どうすればよいのですか」

口の端を引きつらせて、ダーゲルドは笑つたようだ。

「そこまで生に執着するのか。三百年も生きれば、もう充分ではないか」

「充分ですよ。やりたいことは全てやつたし、思い残すことは何もない。彼女たちが望むなら、ハつ裂きにされても構わない。ただ、たとえ憎まれていようと、彼女たちは長年、ともに死線をくぐり抜けてきた相棒です。別れなければならない宿命は受け入れますが、別れたあとも、無駄口くらいは叩き合いたい」

「おまえの言いぶんは矛盾だらけだぞ、フォルスタッフ」

「何百年生きようと、人間の感情なんて、しょせん矛盾だらけですよ。とにかくぼくは、こんな別れかたは気に入らないんです」

かん、からん。

自走夜警の足音が聞こえた気がしたが、むろん空耳だろう。

ダーゲルドは足もとをまさぐり、夜露に濡れた草むらから、一輪の、野生の薔薇を手折った。蒼ざめた月光にかざされると、薔薇の花弁は血の色に燃え上がった。使鬼を失つてもなお、かれのミワが

まだ充分、力を保っていることが知れた。

「ひとつだけ方法がある」

燃える花弁を一枚むしり、かれは宙に放った。それは一匹の赤い蝶と化して、月を愛するフェリアス族のように、ひらひらと優雅な舞を演じた。ぼくは無言でそれを見つめたまま、ダーゲルドが言葉を継ぐの待っていた。

「第六の使鬼とミツを結ぶことだ。ただし、これまでのように悪鬼ではなく、善鬼とな」

ぼくたち魔術師にとつての善鬼とは、一般人にとつての悪魔に等しい。

神といふのか何といふのかわからないが、そういうたもののが眷属であり、闇ではなく、光の世界に属する靈的なエナジーだ。例えば暗闇を這いまわる黒翅虫に、むりやり日光浴させれば、ひとたまりもないように、ぼくたちは光の眷属をこの上なく忌み嫌っている。

「冗談でしょ。いや、まったく冗談じゃない」

「そうとも。わたしは本気で言っている」

「不可能ですよ。百歩譲つてあなたが本気としても、善鬼なんとかミワが結べるわけがない。蠟燭にバケツの水をぶっかけるようなものです。そもそも善鬼ともあらうものが、ヨコシマな魔術師を成敗こそすれ、味方につくとお思いか？　ぼくだって、三百年ほど生きていますがね、そんな話は一度も聞いたためしがありませんよ」

「そうだろう。わたしも聞いたためしがない」

呆れて一の句が継げなかつた。

「この男、こんなくだらない冗談が言いたくて、病身に鞭打ち、はるばる荒野をわたつてきたのだろうか。ぼくのミワの衰えを嘲笑い、かつてぼくに敗れた恨みを晴らそうというのか。おまえはもうしまいだよ、ビア樽野郎。せいぜいお祈りでもしておくんだな、と。（ヘレナを呼び出してやる）

心の中で歯きしりしながら、そう考えた。彼女なら、まだぼくに従つかもしれない。使鬼を持たないダーゲルドなど、見世物小屋の魔術師にも劣る。この場で即座に八つ裂きにして、老醜にピリオドを打たせてやる。

あの強くて美しかつたダーゲルド。憧れの魔術師の名を、これ以上穢さないためにも。

「ただし、秘法として伝わる以外は、な」

ぼくの癪癩が爆発する直前に、かれは口を開いた。

「秘法……ですか」

「いわゆる、口伝だよ。書き残すことをかたく戒められておるゆえ、どんな魔法書にも載つておらぬ。師から弟子へと、ただ口頭でのみ伝えられてゆく、いわば裏技中の裏技だな」

「かつてあなたは、ぼくに伝えるべきことはすべて伝えたと、そう仰いましたか」

燃える薔薇を見つめたまま、ダーゲルドは口の端をゆがめた。

「言った。あの頃のおまえに、この秘法は必要なかつたし、わたしにもまた、伝える資格がなかつたからな。だが今ではおまえのミワは衰え、わたしは死に瀕している。お互に、その時期が来たのだ。それだけの話だ」

魔法は生きものだ。

かつてかれに、そう教えられた。術者が術を選ぶのではなく、術が術者を選ぶのだ。そうして今回の場合みたく、どうあがいても、その時期が来るまで習得できない魔法がある……ダーゲルドは語を継いだ。

「むろん、リスクをともなつてこそその裏技だ。へたをすれば即座に死に至る。が、いざれにしても待つものが死であるのなら、運命に對して能う限りの抵抗をこころみたい。フォルスタッフ、おまえならきつとそう考えるだろう。違うかね？」

無言で首をふった。ダーゲルドは花弁から目を離し、ぼくをまともに見据えた。ほとんど色素を失つた瞳は、けれど月に凍る鏡湖のように、相変わらず研ぎ澄まされていた。戦慄の中で、ぼくはつぶやいた。

「教えてください。その秘法といづやつを

秘法と呼ばれるものの九割九分九厘は、贋ものであるといわれる。インチキ魔術師がシロウトの金持ち相手に法外な値段で売りつける、今も昔もかわらない商売の道具とされる。それらはやたらに煩雑な儀式をともない、呪文は本に綴じられるほど長たらしく、一角獣の

角だと海竜のヒゲだと、入手困難な祭具を要求する。

要するにまったく効かないのだが、ダーゲルドの口伝は違っていた。かれががすべて語り終えたあとも、月はまだ中天にかかっていた。本物の秘法とは、それほどシンプルなものだ。

一輪の薔薇は手折られた記憶すら忘れたように、雑草の中でみずみずしく咲いていた。ただ赤い蝶ばかりが、月を装飾するように、ひらひらと飛んでいた。

ダーゲルドの姿はどこにもなかつた。

自分の身は自分で守れ。守れそうにないときは、用心棒を雇うに限る。

自慢ではないが、三百年の間、悪の限りを尽くしてきたぼくには、敵が多い。おまけにこの首には、莫大な懸賞金までかけられているため、命知らずの賞金稼ぎどもに、常につけ狙われている。そして使鬼が使えない魔法使いは、剣を奪われた剣術使いに等しい。

もちろん、使鬼を呼び出さなくとも、多少の攻撃は可能だ。

火を起こし、水を噴出させ、風をあやつる。自然界に直接作用する呪文があるし、また人形をこしらえて、下等な精霊をのり移らせ、インスタントな使鬼をでっち上げる方法もある。並みの相手なら、この程度の術でも倒せるのだが、円眼鬼クラスの強力な使鬼を差し向けられては、とても太刀打ちできない。

(やはり、あいつに頼むしかないか……)

古来、魔術師は剣術使いとコンビを組む場合が多い。

攻撃力は魔術師のほうがはるかに勝っているが、例えば呪文を唱えている最中など、まったくの無防備になってしまふ。またしょせん生身の体であるため、接近戦に持ちこまれては不利だ。そこで鍛えぬかれた剣術使いとコンビを組むことで、それらの欠点をカバーするのである。

三百年の間に、ぼくは何十人の剣術使いと知り合つた。かれらは当然、魔術師のように寿命が長くない。肉体の衰えは死を意味するので、むしろ一般人より短いくらいだろう。ズ・シ横丁に引っ込んでからは、かれらとのつき合いも完全に絶えた。

ただ一人だけ、「こいつは」と目をつけている剣術使いが、この界隈に住んでいるのだが。

(客?)

戸を叩く音で、もの思いから覚めた。

まさに日が暮れようとしていた。鎧戸の隙間から洩れる光は、弱々しい赤で、かわりに室内の灯火が、ようやく居場所を得たように、鮮やかに色づいてゆく。身を起こすと、寝台が頼りなくしぜんだ。骨がばらばらになりそうな激痛に見舞われた。

「くつ……！」

使鬼の呪いだ。

五匹の使鬼どもが、内側からぼくのミワを突き破ろうとあがいているのだ。しかも単なる悪あがきではなく、確實にぼくの体を蝕んでゆく。彼女たちはそのことを充分理解しており、嗜虐的にぼくそ笑むさまが目に浮かぶよつだ。なんざんぼくにいたぶられてきた仕返しに。

あれから三日経つたが、ダーゲルド・オーシノウの行方は杳として知れなかつた。人形を使って探索させたが、少なくともこのズ・シ横丁にはどこにもいない。ならばやはり幽鬼か、幻の類いかと考えてみたものの、青猫亭の連中は、たしかにかれを見ているのだから、ぼく一人の妄想では決してない。

そうして、ダーゲルドの「秘法」は、夜露とともに消え去ることなく、はつきりと記憶に刻まれていた。

煩雜な儀式もいらなければ、サラマンドルの涙だと海兎の牙などが必要なわけでもない。召喚の呪文も簡単に覚えた。あとは、ある場所へ行つてミワを結べば済むだけの話だ。が、しかし、ぼくはこの三日間、骨の痛みに耐えながら、どうしてもそこへ赴くことができずにいた。

恐ろしいのだ。

善鬼が、光の精靈が、恐ろしいのだ。ぼくをばらばらにしちょうと目くろむ闇の精靈、五匹の悪鬼たち以上に。

また戸が叩かれた。

まったくこんな朝っぱらから、ではなく、日が落ちる前から魔術

師の玄関を叩くなんて、無作法にも程がある。髪を搔きむしりながら寝台から抜け出すと、靴を履き、マントを羽織つて、橢円形の鏡の前に立った。田の前で蒼ざめた美少年が、眉間に皺を寄せていた。（こんな顔ばかりしていると、たちまち老けこんでしまいそうだ）呪文を唱えると、ぼくの顔はしだいに滲み、灰色に曇る鏡面に溶けこむようにして消えた。振り子が五往復もする間に、再び鏡は像を結び始めるだろう。それは櫻の戸板に象嵌された「眼」をとおして映し出される、扉の外の映像なのだ。

刺客ではなかつた。

鏡の中で、頬を上気させたロザリオが、不安げな瞬きをくり返していた。夕陽を背景に、赤く染まつたお下げ髪が乱れているさままで、はつきりと映つていた。

「どうしてもロザリオの姿はミランダを髪髣髴させる。

とくに顔立ちがそつくりなわけではないが、総体がなんとなく似ているのだ。女にしては大柄で、豊満な乳房をもち、長い髪は燃えるように赤い。性格が正反対であることが、かえって肉体の類似を引き立てるようだ。

ぼくが日が暮れるまで起きてこないことくらい、彼女は知っているはずだ。それでも髪を振り乱して戸を叩くのだから、まず、面倒ごととみて間違いあるまい。ほかならぬロザリオでなければ、水をぶつかけて追い返すところだが。

「ごめんなさい、フォルスタッフさん」

戸を開けたとたん、彼女は力が抜けたように、その場にひざまずいた。本来なら蒼ざめているであろう頬は、走ってきたせいでの薔薇色に燃えていた。汗にまみれ、いつもつしましやかな着こなしの服が、しじけなく乱れていた。

多少の面倒ごとなら、亭主のヒゲ達磨みずから撃退するだろう。また常連には腕の立つやつが少なくないので、お礼のタダ酒を用当てに、喜んで手を貸すはずだ。ぼくが知る限り、これまでぼく以上の「面倒ごと」が、青猫亭をおどぞれたことはなかった。

「いいんだよ。どんなやつ？」

身をかがめ、ロザリオの肩に手をおくと、小鳥のように震えていた。とはいえる、ぼくよりひと回りほど、彼女のほうが大きいのだが。

「低地人です」

「このあたりの低地人といえば、ゴーラ族かな」

「ええ。五人も押しかけてきて……」

低地人は主に湿地帯に棲息する、半人半鬼のエルフ族だ。きつち分類できない部分もあるが、おおむね半人半鬼は、明るいエルフと暗いエルフに分けられる。低地人はむろん暗いほうに属し、緑色

の皮膚は両棲類のそれに似て、通常、頭に一、三本の角が生えている。

ゴゴラ族は、半ば水没したまま放棄された街区に巢食っていた。性質は粗暴で気が荒く、一般都市民がうつかりかれらの居住区へ迷いこもうものなら、一度と日の目を見ないと言っていた。ただ、かれらはめったに縄張りの外には出ないので、これまで都市民との悶着は、さほど多くは起らなかつた。

だから、青猫亭にかれらが押しかけてくるなんて、極めて異常なでき」とといえた。

(たしかに、面倒だな)

半分は魔物なのだから、当然かれらの身体能力は生身の人間の比ではない。尻に火をつけられた程度で、泡を食つて逃げ出すとは思えない。やはり、使鬼を用いるしかないだろうか。そうして対エルフ戦にうつてつけの使鬼といえば、ジェシカを置いてほかにない。

ジェシカはぼくの親指に嵌まっている、黄色い指輪に封印されていた。怪力の持ち主で、肉弾戦に威力を發揮する。ことにゴゴラ族のような、ばか力だけが自慢の半鬼を相手にするには、うつてつけだ。間違つてミランダなんか差し向けた日には、店ごと丸焼きにされるだろうから。

ただ……

ロザリオの手を引いて、曲がりくねつた路地を急ぎながら、ぼくは眉をひそめた。

ヘルナほどではないにせよ、ジェシカもまあ、扱いやすいほうである。ざつぐばらんでノーテンキ。まさに、神経質で苛酷なヴィオラを、逆さにしたような性格だが、常に冷静なヴィオラと違い、感情が爆発すると手がつけられなくなる。ゴゴラ族の連中が彼女によって店の外に放り出されたら、お次はぼくが、川にぶち込まれる番だろう。

いや、ぶち込まれる程度では済むまい。現在のぼくのミツには、彼女の暴走を封じ込める余力などないのだから。

家一件ぶんの空き地の前を横切るうとして、雑草の中に転がっているビア樽が田に止まつた。そいつがビア樽の分際で駒をかいていることに気づいて、思わず足を止めた。

田はすでに、とつぱりと暮れていた。それでもかすかに消え残つた光の底で、そいつは気持ちよさそうに、ふくれた腹を上下させているのだ。

「ヘンリー王じゃないか」

まさか本名とは思えないが、この界隈の連中は、だれもがそう呼んでいた。ビア樽のような巨漢にして、大酔漢。むしろぼくの名前は、こんな男にこそ相応しいのかもしれない。ともあれ、こいつとこんな所で行き逢つたのも、何かの縁かもしれない。

不安げに目をしばたかせるロザリオに、ぼくは微笑みかけた。
「叩き起こしても損はないと思つんだ」

歩み寄れば、ビア樽を見下ろすかつこう。見事なまでに隙だらけで、剣は、からうじて帯で腰に引っかかつたまま、草の中にだらしなく投げ出されていた。ぼくの不安は、にわかに増した。

ミワが弱まれば、人を見る目まで節穴になつてしまふのだろうか。白髪混じりの髪は乱れ、鼾のリズムで口ひげがそよぐ。年寄りのようであり、案外若いのかかもしれない。そもそも、ヘンリー王と呼ばれるこの男の年齢はおろか、素性を知る者もこの界限にはあるまい。ただ一年ほど前から、いつのまにかズ・シ横丁に棲みつき、常に酔っ払っては、所構わらず転がっていることを除けば。

「カゼをひくぜ、王様」

声をかけたが、まつたく反応はない。つま先で軽く蹴ると、腹がぼこんと間抜けな音をたてた。口ひげが、生きもののようにうごめいた。

「カゼをひこうが、火を吹こうが、わしの勝手と知るがいい。例え王国をくれてやると言われたつて、起きねえもんは起きねえんだ」寝言にしては、王立劇場の役者のように朗々と響く声。それでも薄目すら開けず、たちまち鼾をかき始めるのだから、呆れる。ぼくは苦笑しつつ、身をかがめてささやいた。

「あいにく、王国の持ち合はせはないんだ。百年以上前に、取りそこなつたからね。そのかわり、酔い覚ましの酒なら」駆走してもいい

い

かつ、とヘンリー王の目が見開かれた。酒臭い息が、炎のようになき上がった。

「ならば、話は早え」

こいつ、まだ飲むつもりか。そう考えたときには、ビア樽がごろりと縦になり、膨れに膨れた腹が、ぼくの視界をふさいでいた。アダムの実をふたつぶら下げたような、ピカピカの赤い頬。ばかでか

いゲップをひとつ吐き、まばらな歯をのぞかせて、ビア樽はニヤリと笑うのだ。

「天国へなら、喜んで同行させていただくなもんだ、なあ兄弟」
ぼくたちは天国への道を急いだ。

ヘンリー王は、滑稽なほど長いマントをはためかせ、今にもずり落ちそうな剣を、革の鞘ごと街路に引きずりながら、それでも遅れをとらなかつた。ふうふうと吐く息が夜空を焦がし、月をレーダムの実の形に縮み上がらせた。青猫亭の前には、七人の男たちが転がつていた。

死体かと思い、つま先でつついてみると、ああとかうとか、借錢取りに生返事するような呻き声をもらした。見れば、青猫亭の常連の中でも、腕つ節の強い連中ばかり。中には火のついた煙草をくわえたまま、伸びてゐるやつもいた。

「よお、気が利くねえ」

ヘンリー王がパイプをもぎ取り、一服して、また男の口に戻した。店の中は、思ったほど荒れていなかつた。テーブルと椅子がいくつか逆立ちしており、床には多少の料理や、割れた酒瓶がまき散らされていたが。要するに、表に転がっていた七人が、いとも簡単に放り出されたあと、他の客は皆、尻尾を巻いて逃げたのだ。

ヒゲ達磨は、カウンターの後ろで慄然と腕を組んでいた。まったくケガをしていないのは、最初から手を出さなかつたからだろう。ぼくたちが入つて來るのを見届けると、仏頂面のまま、店の奥へ目をやつた。そこでは五匹の半鬼どもが、おおいに飲み、かつ食つていた。

（前の三匹はザコだ。が、奥の一匹は少々、厄介だな。ほとんど「プリン化している）

瞬時にぼくはそう判断した。

コゴラ族を含め、半人半鬼のエルフは長く生きればそれだけ、人より鬼の要素が勝つてくる。奥の一匹は、少なくとも五百年は生きているのではないか。強靭な筋肉を包む皮膚は、甲羅のように

角質化して、尖った突起を肩からいくつも生やしていた。かれらに比べれば、ヘンリー王の巨躯も見劣りするほどだ。

三日前、ぼくとダーゲルドが座っていた席に、その一匹は腰を据えていた。残りの三匹は立つたまま飲み食いしていたが、ぼくが近づくと、おもむろに威嚇する調子で身構えた。

「あいにく、そこはぼくの席なんですね」

そう言つと、人とも獸ともつかない声で、ちんぴらじもはわめいた。言葉の意味はさっぱりわからないが、失せやがれとか死にてえのかとか、そんなところだらう。

「もちろん、きみたちが相応の代金を支払つてはいるのであれば、ぼくだつて、席を譲ることにやぶさかではないさ。でも、もしそうでなければ、今すぐ席を空けてくれたまえ。とくに今夜は、友達とおいに飲み、かつ語り明かすつもりなんだから。天国についてね」

片手を閉じてみせた。ばかにされたと思ったのか、三匹のちんぴらは床に皿を叩きつけ、きーきーと踊り上がった。長い舌が頸の下まで垂れ、大量の唾液が料理の残骸の上にあふれた。まったく、これから食事をしようとした時に、食欲が減退するような光景を見せつけてくれる。

「言葉が難しそぎたのなら、もつとわかりやすく言つてあげるよ。ロム川の魚の餌になりたくなれば、とつとつ失せなー。」

三匹のザコを表に放り出すのは、たやすかつた。もちろん、使鬼を呼び出すまでもない。ぼくはあらかじめ呪文を唱えて、風塊を発生させ、マントの下に隠していた。

案の定、ちんぴらどもは挑発に乗つて、いつせいに飛びかかつてきた。絵にかいたような単細胞。あとは鬪竜士のように、マントをひるがえすだけでよく、三匹は勝手にスッ飛んで行ってくれた。今ごろは七人の常連たちと、仲良く転がっていることだらう。

「何かご意見は？」

ぼくは二匹のゴブリンに微笑みかけた。

よく椅子が潰れないものだ。腰かけている状態で、田の高さがぼくと変わらない。尖った耳。緑色の禿頭から突き出た、三本の角。黒革のぼろズボンだけを身につけ、アクセサリーなのか、それとも鎧がわりか、上半身に太い鎖を巻きつけていた。壁に田を遣ると、一本の巨大なハンマーが立てかけてある。これがかれらの得物なのだろう。

二匹とも、牙が食み出した唇に薄笑いを浮かべ、陰湿な細い目で、こちらを見据えている。その瞳は、金色の光をおびていて。手下を瞬時に放り出されたにもかかわらず、いやに落ち着き払っているのが気に食わない。にわかに警戒心が増してゆく中、ようやく一匹が口を開いた。

「ぬしがフルスタッフか」

これ以上ないほどのしゃがれ声。ひどく訛りながらも、共通語を話したところが意外であり、不気味でもあつた。

「なるほどね。どこで聞いたのか知らないが、最初からぼくがお目当てだつたのか」

「モギヤナヤン。ぬしがこつつか、ザ・ザが荒地の、向こううん方が
ら来やつた旅歌人から聞きやつた。黄金の欲しかるギヤナヤン。ぬ
しが首をば取つてさらつて、お富ギヤナ持つてきよれば、黄金の蝶
の舞うじつ、黄金の蛇の這うじつ、宝の村に溢るギヤナヤン」

要するに、ぼくの首を王宮に売つて黄金を持ち帰りたいと。

総じて、エルフや魔族は黄金や宝石に目がなかつた。自然界の鉱
脈は、たいていかれらが守つてゐるし、また人の手によつて抽出さ
れ、精製され、磨き上げられた貴金属は、かれらの垂涎の的である。
けれどそれで商売をする氣など、さらさらないらしく、ひたすら集
めて喜ぶだけ。時には、どんな手を使つても。

(刺客だつたとはね)

単細胞の低地人と、舐めてかかつたのがいけなかつた。ひとたび
狩におもむけば、かれらほど巧妙なハンターはいない。酒場荒らし
といふ餌に、ぼくはまんまと食いついてしまつた。ザコを蹴散らし
たことでいい気になつて、かれらに近づきすぎた。

「はいほおおおおおおつ！」

奇声とともに椅子が振り上げられ、ぼくの頭上に高々とかかげら
れた。その一撃は、かるうじてかわしたものの、飛び散る木片の中、
二匹めのゴブリンが振り上げた大ハンマーが、すでに面前にせまつ
ていた。

やれやれ。

ミワの衰えとはみじめなものだ。一度は王国を滅ぼしかけた大魔
法使いが、こんな場末の酒場で、低地人」ときに頭をぶち割られて
お陀仏だなんて。しかしまあ、さんざん悪の限りを尽くしてきたの
だから、これで正解なのかもしれない。ダーゲルドのように、じわ
じわと身を蝕まれてゆくよりは……

ぎん、と、金属どうしがぶつかる音が響き、火花が盛大に飛び散
つた。けれどもぼくの頭蓋骨は無事であり、火花も自身の目から散
つたわけではなさそうだ。

「黄金が飲めるかよ。例え王国じゅうの黄金をくれてやると言われ

たって、わしは今飲みてえんだよ

呆れたことにヘンリー王は、鞘^{ササ}と斜めに持ち上げた剣に片手を添えて、ゴブリンの巨体から渾身の力で降りおろされた大ハンマーを受け止めていた。反動で半鬼はひっくり返り、テーブルを粉碎しながら、床に叩きつけられた。

怒声を発しながら、もう一匹のゴブリンが、車輪のようにハンマーを振り回し始めた。柱が砕け、壁に穴が開き、店全体がぐらぐら揺れた。

「わしの店が、わしの店が！」

ヒゲ達磨の嘆きをよそに、無数の酒瓶が次々と打ち砕かれた。次にビア樽も同じ運命をたどるかと思われたが、信じられない身軽さで後ろに飛び退き、柄に手をかけて低く身構えた。半眼の底が銀色に輝くのを見た。その目は、草地に寝転がっていた隙だらけの酔っ払いとは、別人としか思えなかつた。

「天国行きの竜車の切符を。なんてもつたいねえ」

いまひとつ意味不明な決めゼリフとともに、剣が抜かれた。銀色の閃光が走り、何かがゴブリンの手を離れて、右と左の壁に、それぞれ大穴を開けた。それがまっぶたつに割られた大ハンマーだとわかるまで、少なくとも四回の瞬きを必要とした。

信じがたいことに、ハンマーの金属部分までが、奇麗に二分割されていたのだ。しかもかれの剣は、すでに鞘におさまっていた。

(これは！？)

噂にきく、イ・アイル流かもしれない。実際に目にするのは始めてだが、タジール公領のさらに東方で、少数民族が編みだした剣法と聞く。抜く瞬間に、物理法則を越えたパワーが生じるという。その民族は、とつぐの昔に滅びたらしい。ただ、ザートル・イーチルという名の盲目の達人が、旅を続けながら悪人をやつつける叙事詩が、吟遊詩人たちによつて今に歌い継がれていた。

「先に抜いたのは、そつちだぜ」

大ハンマーに、抜いたも抜かぬもあるのだろうか。緑色の顔をさらに蒼ざめさせて、立ち尽くすゴブリンの後ろから、もう一匹が自身の得物を取りなおすのが見えた。ひとつだけわかっているのは、チャンスが今しかないことだった。

「ザル・ドワール・アム・ドミーム。偉大なる地底の支配者。暗黒の王の御名において、我は望み、我は求む。大地の精靈にして、コボルト族の守護神。ジェシカをここに召還せんことを」

左の手の甲を目の前にかざし、親指に嵌められた、金雀児色の指輪に口づけした。稻妻のように光がほとばしり、輪踊りする小人たちのシリエットを描くと、やがて一人の小柄な女の姿に凝縮された。ジェシカは大鉈を腰のうしろにさしたまま、目の前に立つていた。背丈はぼくとかわらない。肩に触れるくらいの金色の髪は、麦藁のようになじみ放題。広い腰帯の下に、短い布を巻きつけているだけで、野生児めいた、たくましい脚は一本とも剥き出し。片手で易々とハンマーを受け止めた姿勢で、ぼくを振り向いた。

「こんなものを、こんなところで振り回されでは、亭主が哀れだろう。フォルスタッフ、あんたときたら、本当に気が利かない」

と、なかなかの人情派だが、ぼくにはつらべ当たる。

「この喧嘩、あたしが買つていいよね」

ゴブリンどもをさし置いて、意味ありげにヘンリー王を眺めた。剣の柄から手を離し、かれは一ヤリとまばらな歯を見せた。ゆつくりと店を出てゆくジェシカの、いかにも無防備な背中を、ゴブリンどもは指をくわえて見ていた。扉がぱたんと閉まる音で、ようやく我に返ったのか、一匹は足音を響かせて駆け出した。扉が粉々に砕け、ヒゲ達磨が悲鳴を上げた。

「その扉の彫り物！ 五万ダラントもしたんだぞ！」

月の光で、店の表は明るかつた。

ゴブリンの一匹は相変わらず鉄槌を、もう一匹はどいで見つけたのか、ごつごつした棍棒を手にしていた。かれらに対峙するかつこうで、ジェシカは腰に手をあて、小首をかしげて、不敵な笑みを浮べていた。首を反対側へひねると、こきりと骨が鳴る。

こましゃくれた少女のようだと、ぼくは思う。胸当ての下に膨らみはほとんど感じられないが、あらわな臍から腰へかけてのラインは、南方の果実のように充実していた。すべてに均整のとれたミランダとはまた異なり、ジェシカには野の花のような趣きがある。自身の審美眼に満悦していると、彼女にギロリと睨まれた。

「またいやらしい目で見ているな。あとで覚えていろよ」

こんな体でなければ、弱点を責めてのたうちまわらせてやるのだが。角亀のように、首をすくめる以外なかつた。

一匹のゴブリンは厭な感じの目配せを交わすと、一匹がもう一匹の後ろに隠れた。ジェシカとの距離は、中型の飛竜一頭ぶんくらいか。驚いたことに、同時に駆け出した一拳手一投足が、定規で測つたように揃っているのだ。おそらく彼女の目には、一本の得物を手にした、一匹のゴブリンに見えているだらう。

「はいほおおおおお！」

おぞましい奇声が、月夜にこだまを返した。

ジェシカは腰を低くして身構えた。大鎧を抜こうともせず、その

まま掌を広げた右手を、前方に突き出した。すさまじい風塊が放たれ、先頭のゴブリンを直撃した……かに見えたが、粉碎されたのは残像に過ぎなかつた。信じがたい身軽さで一匹は両脇に飛び退いており、それぞれの得物を振り上げると、頭上からジエシカを急襲した。

骨の砕けるような、厭な音が鳴り響いた。彼女はそのままゅつくりと、前のめりに倒れた。勝利に酔つて、ゴブリンどもが腕を振り上げた。

「はいほおおおおおつー！」

「ジエシカ！」

駆け寄ろうとしたぼくの肩を、何者かが引きとめた。振り返ると、ヘンリー王が小刻みに首を振つていた。今さら再生の術などかけても無駄だ、というのか。いや、そうではない。かれの視線を追うと、麦藁のような髪を搔き亂しながら、ジエシカが起き上がるといひだつた。

「眠気覚ましには、ちょうどよかつたな。ちょっとは遊んでくれないと、慣れ甲斐がないからねえ」

「ゴブリンどもは、おおいに慌てた。

無理もない。大鎧と棍棒を、彼女の至近距離から、渾身の力で叩きつけたのだから。これ以上ないほどの、手応えも感じたろう。なのにジェシカは薄笑いを浮べたまま、片目を閉じて、指一本で手招きしている。

「もう一度仕掛けでみないか？　うまくゆくかもよ」

一匹はそそくさと後ろに退き、距離を得たところで、再び前後に身構えた。意外な余裕が気になった。

例の奇声を合図に、ゴブリンどもは同時に地を蹴った。いつたいどうなつていてるのか、今度は横から眺めているぼくの目にも、一匹の姿がぴつたりと重なつて見えた。ひとつの中から四本の腕が生え、四つの目をつけた、おぞましい怪物と化していた。しかもその体は、二倍に膨らんでいた。

ジェシカは身構えることなく、片手を腰にあてて立っていた。怪物の巨体が見る間に接近し、小柄な彼女に覆いかぶさる。四本の腕がすさまじい速さで振り回され、鉄槌と棍棒と拳で、彼女をめつた打ちにした。生身の人間なら、拳の一撃だけで骨がばらばらに砕けたろう、強烈な打撃が無限に降り注ぐ。

ようやく打撃があつまり、ぐつたりと伸びたジェシカの体が、高々と持ち上げられた。そのまま力を込めて投げ飛ばされると、叩きつけられた樹木の幹を、まっ�たつにへし折った。

うつ伏せに倒れた状態で、彼女は動かない。四本腕のゴブリンは慎重に歩み寄り、棍棒を捨てて、大ハンマーを頭上に振り上げた。ついに彼女の頭部が打ち碎かれるかと思つたとき、怪物はいとも簡単に引っくり返った。その足をつかんだまま、ジェシカが身を起こした。

「勝負あつたな」

ヘンリー曰く言われるまでもない。最初から勝負にならなかつたのだ。

「ゴブリンの両脚を、自身の両脇にたばさみ、ジョシカはとも楽しそうに、ぐるぐると回し始めた。

「はいほおおおおおつ、なんてな！」

ジョシカの高笑いが夜空をつんざいた。鬼だ。いや、鬼には違いないのだが、なんてえげつないやつだ。わざと先に打たせておいて、お次に自身が屠る快楽を最大限に引き出そうというのだろう。こうなると、むなしく腕を振り回しているかれらが、哀れに思えてくる。さんざんぶん回したあげく、彼女は不意に、そして無慈悲にゴブリンの足を解放した。月の下に「じちや」「じちや」と積み重なるズ・シ横丁の屋根を越えて、ゴブリンの巨体は、飛竜のようにすっ飛んで行つた。例え話ではなく、本当にロム川に叩き込まれたに違いない。ただ、大鉈をついに用いなかつたところが、人情派ジョシカの面目躍如たるところか。ミランダなら迷わず炎の剣をふるい、ロースト・ゴブリンにしていただろう。

「ウォーミングアップは、こんなところだな」

と、不吉な文句をつぶやいて、ジョシカはギロリとぼくを眺めた。

「もう用は済んだ。さつさと指輪に戻るんだ。さもないと……」

「どうしようつて言うのを」

舌なめずりするさまに、背筋が寒くなつた。タチのよくないことには、こいつは与えられる懲罰を、どこか喜んでいるフシがあつた。ぼくに言われたくはないだろうけど、変態である。まして衰えたミワで締めつけようとしても、ぬるま湯くらいにしか感じまい。むしろ手ぬるいのが不満だからと、反抗してくるタイプだ。

ある意味、このての被虐趣味者が、最も扱いにくい。

「そろそろ潮時じゃないのかい、フォルスタッフ。ミランダ姉さんにこんがり焼かれるよりは、あたしに首の骨を折られたほうが、まだ楽に死ねるよ」

「新しいご主人さまでも探すつもりか？」

「どうだか。ま、しばらくは自由の身を満喫するわ。あなたのことはそんなに嫌いじゃなかつたけど、捷は捷。優しいあたしに屠られるのを果報と思って、覚悟するがいいわ」

とまあ、予想どおりの展開である。

ぼくは後退りつつ、そこに立つて居るはずのヘンリー王に目をやつた。けれどもかれは、すでに一個のビア樽に戻つて、地面に転がっていた。もちろん、蹴飛ばしたくらいで簡単に止まる軒ではない。絶望のあまり眩暈を覚えたとき、大きな酒の瓶を胸に抱いて、戸口から駆け出してくるロザリオの姿が、目に飛びこんできた。じつに機転が効く、いい娘だ。ぼくがこんな汚れた身でなければ、ぜひ嫁にもういたかった。けなげにも彼女は、息を弾ませてこう叫んだ。「フルスタッフさん、ひとつだけ無事でした。早く、これをそのお方に！」

効果はてきめんにあらわれた。

酒のにおいを嗅いだとたん、ヘンリー王はひくひくと鼻梁を蠢かせ、むつくりと上体を起こした。赤子でも抱くように瓶を受け取ると、頬ずりし、大きく傾け、咽を鳴らして飲みに飲んだ。最後の一滴が、きらきらと月光を浴びながら、醉漢の口の中に消えた。

ダーゲルドでさえ、すべて飲み干しはしなかつたのに。ぼくは別の意味で、不安になつてきた。

右に左によろめきながら、ヘンリー王は立ち上がった。一本の足で巨体を支えているのが、奇跡のようだつた。燃えるような息を吐きながら、醉漢は前へ進んだ。断続的にもれるゲップ。血走った目は半眼で、やはり鞘に収めたままの剣先を、街路に引きずつっていた。隣に並んだところで、肩を叩かれた。恐るべき酒臭さ。

「よお、兄弟。こいつはじつに素晴らしいねえ。天国だねえ、ちくしょうめ。天国への階段が見えるつもんだ」

と、完全無欠のぐでんぐでん。ジェシカの声が響いた。

「イ・イルの使い手か。ふん、あんたの悪運の強さには、いつもながら呆れるよ」

見れば意外なことに、彼女は腰の大鉈を外し、左手に引っさげていた。長い付き合いになるが、ジェシカが一人の人間を相手に鉈を抜いたのは、今夜が初めてかもしねない。

ヘンリー王はよろよろと足を踏み出し、柄に手をかけた。常に上体は揺れているが、腰から下はまったく動かないのだ。

「お前さんには、何の恨みもねえが、やくざな渡世だ。ごめんなすつてと言つておく」

「あたしも先に忠告しておくけど、手加減はしないよ

だめだ、と思つた。

たしかにぼくは平素からこの酔漢を、腕の立つ男だと認めていた。だらしない仕草で包み隠そうとしても、隠しきれない鋭利さが垣間見えたからだ。しかし、どんな達人であれ、剣術使いが使鬼とまともにやりあつて、勝てるわけがない。しかも自慢ではないが、力でジョシカを上回る使鬼など、まず思いつかない。

もしヘンリー王に勝ち目があるとすれば、相手が油断している場合に限る。ふらふらと攻撃をかわしながら、隙に乘じて仕留めるという、これも東方伝来の酔いどれ拳法と同じカラクリだ。最初からネタがばれているのでは、お話にならない。

しかもジョシカは、先のゴブリン戦で、充分ヒートアップしていった。鉄を叩いて鍛えるように、わざと叩きのめされた肉体は、金属の鎧よりも強靱になつているはずだ。

こうなつては、もうだれにも止められない。日頃はのんびり屋の彼女だが、ひとたびヒートアップすれば、好戦的な修羅としての本性が剥きだしになる。スマートなミランダやヴィオラより、よほどタチがよくない。文字どおり敵を血祭りにあげるまで、暴走し続けるだろう。

むろん、最後に血を絞り尽くされるのは、ぼくなのだ。

「覚悟しな、ビア樽！」

ぎくりとしたが、その言葉はぼくではなく、ヘンリー王に投げかけられたもの。たちまち薙ぎ払われた大鉈を、酔漢はわずかに抜いた刀身で、がつちりと受けとめた。世界をつんざく音が響き、銀色の火花が散つた。

「はあああああ！」

ジョシカは鉈を返しながら後ろに飛び退き、すかさず踏み込んできたヘンリー王の一撃を浴びた。逆手にかかげた一刀を、足を開いて踏ん張り、両手で鉈をかつぐ恰好で、かるうじて受けとめたのだ。よほど手が痺れたのか、彼女は眉間に苦悶の皺を寄せた。対して、大醉漢は半眼のまま、口ひげの下に笑みすら浮べていた。

両者は同時に飛び退いた。ジェシカが鉈を構えなおし、ヘンリー王は再び剣を革の鞘におさめた。両者の間に、究極まで張りつめた弦のよじこ、殺氣の糸が張られていた。

「やるじゃないか」

「お前さんこそ」

「だけど次は、本当のビア樽になつてもらひよ」

ぺろりと凄惨な舌なめずりをして、ジェシカが踏み込んだ。鬼の膂力で、次々と打ち込まれる大鉈を、ビア樽、いやヘンリー王は、逆手にかざした剣の根もとで、軽やかに受けとめてゆく。酔っ払いのだらしなく肥えた体に、鬼神が乗り移っているとしか思えなかつた。

と、意想外の善戦に思わず見入ってしまったが、このまま放つておくわけにもいかない。生身の人間の体力には限りがあるが、使鬼はダメージを受けない以上、無限の攻撃力をもつ。

「ヘンリー王、加勢する！」

そう叫んで飛び出したものの、今のぼくに何ができる？ 援護のつもりで、なまじ火弾など撃ち込んだところで、効かないどころか、

かえってジェシカに油を注ぎ、ヘンリー王の集中力を削ぐだけではないか。ならばやはり、別の使鬼を呼び出すしかないのか。

うなりながら左手の甲をかざした。赤、紫、青……と、人さし指で一本ずつ触れてゆき、小指に嵌めた緑色の指輪の上で逡巡した。

(ハーミアか……)

こいつは、ヴィオラに次いで気難しい、扱いにくい女だ。

理屈屋で、痼症が強く、氣位が高い。まああの二つは、ヘレナ意外は皆そうなのだが。ただ、ジェシカを封じるにはうつてつけで、風の精霊であり、また植物を自在に操る彼女は、地靈であるジェシカのエナジーを、たちまち吸い取ってしまうだろう。植物は地力を奪うという理屈だ。

問題は、呼び出したはよいが、彼女が言うことを聞くかどうかである。ぼくは再びうなりながら、戦況に目を轉じた。

ジェシカとヘンリー王は、対峙したまま睨み合っていた。酔漢の剣はまた鞘におさめられ、次に抜かれる瞬間を待つて、力をためているのだろう。ジェシカは片手を添えつつ、大鉈を高々と頭上にかざしていた。十割本気の構えではないか。ヘンリー王がつぶやいた。

「加勢は無用だなあ、フォルスタッフ殿」

「しかし……」

「なに、次で決着がつくさ。ほかの姉ちゃんを呼び出すんなら、それからでも遅くねえだろう

勝てる気がしない。

幻のイ・アイル流の達人とはいえ、次は全力で打ち込まれるであろう大鉈に、太刀打ちできるとは思えない。それこそビア樽どころか、薪のように断ち割られて終わりではないか。

「あんたこそ、無駄死には無用というものだ。いつたい、ぼくのために命を落とす義理が、どこにある？」

「まだ死ぬと決まったわけじゃあるめえ」

しゃつくりをひとつして、まばらな歯を覗かせた。月光を浴びて、まがまがしい祭具のように、大鉈が輝いた。じりじりと、わずかずつ間合いが詰められてゆく。

今度ばかりは、ジェシカもうかつに打つて出ようとしない。抜く瞬間に最大の力を得る、イ・アイル流の特徴を、よく見抜いている。賢い娘だ。力任せに暴走するばかりが、取り柄ではない。それゆえに、手強い。

「やめたよ」

ずん、と地面に大鉈が突き立てられた。ジェシカは頭の後ろで指を組み、あらぬ方を向いていた。隙だらけの姿勢であり、降参の意思表示だ。もちろん、ぼくは驚いた。

「なぜ？」

「言つておくけど、この剣術使いを侮辱したんじゃないよ。あたしの負けなら、負けでいいってことさ」

「でも、なぜ？」

「あんたもしつこいね、フォルスタッフ。苦手なんだよ、捨て身でかかるてくるやつがさ。あたしとわたり合つてるとき、こいつはすでに生きちゃいないんだよ。死を覚悟してるとか、そんなレベルじゃない。とっくに死んでるんだ。とっくに死んでる男を、どうやって殺すのさ？　だからあたしの負けってことで、吟遊詩人に言い触らしたって、文句は言わないよ」

王侯貴族から巷のあやしげな剣術使いまで、不名誉な事実を吟遊詩人に歌わることを、ひどくいやがる。かれらに歌われたが最後、

いくつもの荒地を越えて、その事件が人々の耳に伝わるし、また長い年月を経れば、伝説として定着してしまうからだ。

呆気にとらえながらも、ぼくは精霊封じの呪文を唱えた。ジェシカはまつたく抵抗を示さず、大鉈の柄尻の上で指を組み、顎をのせていた。間もなく彼女の全身は武器ごと、光の荒い粒に解体され、黄金色に輝きながら、指輪の中に吸われていった。気が抜けたとたんに、眩暈をおぼえて、ぼくは片膝をついた。

小指に嵌めた、緑色の指輪が異様な輝きを放っていた。どこからともなく、風がわき起こり、吹きすさぶ音に混じって、女の笑い声が響いた。

「惜しかったですわ。呼び出してさえいただけたら、ビア樽どうし、仲よく屠つてさしあげたのに。わたくしはジェシカほど、甘くなくつてよ」

風の中、石畳を割つてイバラが伸び、足にからみついた。棘が肌に食い入るまま、イバラはさらにぼくの胴を、腕を締めつけてくる。「やめる、ハーミア！」

力を絞つてミワを張ると、イバラがちぎれ、風がおさまった。気がつけば、ヘンリー王はすでに一個のビア樽と化して街路に横たわり、高齢をかいていた。

ぼくはヘレナを呼び出した。

彼女は水妖である。

長い髪は黒い流れのように、ほつそりと引きしまった肩に、背に、なびいていた。つぶらな瞳は黒く、それは髪同様、光の加減によつては紺碧の輝きをおびた。亜麻色の布を、つつましやかに身にまと、装身具といえば、手首の細いリングと、やはり細い銀色の髪飾りくらいなものだった。

火妖であるミランダと並べれば、一対の絵ができるだろう。お互に美しい髪をなびかせ、片方は豊かな肉体を誇らしげに燃え上がらせているのに対し、彼女のほうは、ひかえめな、けれど均整のとれた体を、しつとりと潤わせていた。

どちらかというと小柄であるが、ジェシカほどではない。それでもなぜか彼女は、そのことを苦にしているらしく、「小さい」と言わることを、非情にいやがつた。彼女の前で、この一言は禁句なのである。

人魚にせよウンディーネにせよ、娘の姿をもつ水妖が総じておとなしいように、彼女もまた穏やかな性格の持ちぬしだった。水がなければ、人は生きられない。それどころか、あらゆる生きものの源といえるだろう。人は水辺に町を作り、雨の恵みをうけて耕作する。けれど、ひとたび手におえなくなると、水ほど恐ろしいものはない。火には限りがあるけれど、水は無限ともいえる圧倒的な質量で襲いかかる。これほどまでに温厚なヘレナでさえ、そんな水の性質を有していることに違はない。

もしも本当にヘレナを敵にまわせば、ミランダより恐ろしい相手となるだろう。

だから彼女を呼び出すときは、ぼくもかなり悩んだ。悩み抜いた末に呼び出すことにしたのは、ハーミアの宣戦布告に肩を押された恰好である。

ハーミアとヘレナは、姉妹のような関係にあった。ハーミアは風の精であり、また植物をもつかさどる。風と植物が、水と深い関係にあるのは、言うまでもない。何かと気難しいハーミアであるが、ヘレナにだけは頭が上がらない傾向にある。水を断たれれば、植物が枯れてしまうようだ。

「ジェシカはまだ中立とみていいかもしない。けれど、ミランダとハーミアは、もはやあからさまに敵意を示している」「

耳の長い巨獣が地下に眠るという、古代神殿の廃墟である。数日前にダーゲルドと対面したところ。もつすぐぼくのミワが死き、使鬼たちに滅ぼされるであろうことを宣告された丘だ。今日はまだ朝のうちにのぼったのだ。新しい日の光が、彼女の黒髪を紺碧に輝かせるよ。」

丘を覆う草は、まだ露をしつとりと宿していた。きらめく草地にヘレナは腰をおろし、みずから髪を掌にためては、わらわらと滑り落ちるにまかせた。

「わたくしも、お味方のままでいるとは限りませんでしょう」「わかっている」

「それでもお呼びになつたのは、なぜですか」

ぼくはぎくりとした。やはりヘレナも変調をきたし始めている。ぼくをこまらせるような質問を、ぶつけてくる女ではなかつた。

魔方陣を描くことも、もちろん考えた。危険な精霊、とくにデモンを呼び出すときによく用いるやり方だ。魔方陣の中に召喚し、封じ込めることで、こちらに危害が及ばないようにする。もちろん易々と結界を破られる場合もあるが、少なくともそのまま呼び出すよりは安全だ。

ミワの衰えた現在のぼくは、丸腰に等しい。ヘレナといえども一人の使鬼に過ぎないことは、重々承知している。それでも魔方陣を

描かず、またヘンリー王を同席させなかつたのは、なぜか……ぼくは自嘲的に微笑んだ。

「感傷だよ。きっと、それ以外の何ものでもない」

かつては平時にも、ヘレナとともにいたことがあった。もつとも、いつ敵に襲撃されるかわからないといった、理由をつけた上でだが。ヴィオラをザーリオと呼んで召し使っていたという、ダーゲルドとおそらくは同じ気持ちで。

きっと、そんな感傷の名残りなのだ。

「わたくしに、何をお望みですか」

「とくに考えていなかつた。もちろん、おまえに泣きついて守つてもらいたいという、下心はおおいにあつたさ。ただ呼び出したとたん、おまが襲いかかつてくるのなら、それはそれでよかつたんだ」

「わたくしに命を奪われても?」

「少なくともハーミアよりは、優しく殺してくれそุดだからね」

眼下に横たわる街のいたるところで、水路がきらめいていた。お世辞にも美しくないズ・シ横丁の、積み重なる屋根たちさえ、祝福を浴びているような朝だった。

彼女が悪鬼でなければ……ふとそんな考えが、頭をよぎった。ぼくたちもまた、祝福されたのだろうか。永遠に。永遠なんて、存在しないとわかっているのに。

「朝は苦手ではなかつたのですか、ご主人さま」「くすりと肩をすくめて、彼女は黒い瞳を向けた。ぼくをまだ主人と呼んでくれたことが、やつぱりうれしかった。

「最近はね、闇のほうが恐ろしく感じる時がある。闇の力を得てこそ、この肉体を保つているぼくなのにね。横丁には月や星の光がさざず、灯火もまったく届かない一角が多いけれど、そんなところに入り込んだりするとね、食べられてしまいそうな気がするんだ」「食べられる、のですか？」

「ああ。闇そのものに呑みこまれ、永久に出られなくなりそうな。限りない無の中に、閉じ籠められてしまいそうな。実際に、闇が質量を得てぼくに纏いつき、手放すまいとする意志みたいなものさえ感じる。あれほど大嫌いだつた朝の陽光に、いつのまにか救いを求めている自分に気づく」

「夢はご覧になりますか？」

ぼくは口ごもつた。言われてみれば、最近また、ヴィオラの夢を見るようになつていた。まるで彼女を目の前に呼び出しているような、生々しい錯覚とともに、目覚めることさえあつた。

途絶えた会話の糸口を探すように、草の中に視線をさまよわせた。天人や怪物のレリーフを宿したままの、神殿のカケラが散らばつていた。一輪だけ咲いている赤い薔薇が、思いがけない鮮やかさで、目に飛びこんできた。

「ダーゲルドが訪ねてきたことは、知っているね」「存じております」

指輪の中には封印されてる間も、使鬼たちは完全に眠つていいわけではない。個性にもより、例えばジェシカなどは本当に熟睡している場合が多いし、ミランダは戦闘以外には基本的に無関心だが、ヘレナはぼくの日常をよく観察していた。ダーゲルドとの間に交わされた会話も、耳を澄ませてすべて聞いていたのだろう。もちろん、それを責めるつもりはない。

「どう思つ?」

「善鬼とミワを結ばれることについて、ですか」

「そうなれば、いすれはおまえも、善鬼と闘わなければならぬ」

光の存在、善鬼が彼女たち悪鬼の文字どおりの天敵であることは、言を待たない。光は闇を駆逐する。ただもちろん善鬼にもレベルがあり、たいていの光なら、彼女たちの闇に陵駕されてしまう。けれどもダーゲルドは、闇の中の闇、ヴィオラをもそれに駆逐させようというのだ。よほど強力なエナジーと、結びつけるつもりなのだろう。

ヘレナは指を光にかざした。光のささない水底のように、彼女もまた、はかり知れない闇を自身の内に秘めていることが、信じがたかった。

「それが運命なら、受け入れたいと思いますわ」

「精霊にも、運命という概念があるのか。束縛しておいて、こんなことを言うのはおかしいけれど」

「わたくし自身の力ではどうにもならないもの、それが運命なのでしょう。あるいは、わたくしの意志であるように見えても、実際にはどうでないものが。例えば……」

「たとえば?」

「使鬼の撃とか」

術を破られた術者は、おのが放った使鬼に食い殺されなければならぬのも撃。ミワが弱まつたとき、おのが使鬼と闘わなければ

ばならないのも、また捷。それを運命と呼び、逆らえないなら従おうという。優しい彼女の、これは彼女らしい宣戦布告なのかもしない。ヘレナは語を継いだ。

「ただし、わたくしにも意志とこゝるもののがござります。運命の力に抗し得る限りは、わたくしはご主人さまを守つてさしあげます」

「//リンドやハーミアと闘うことになつても?」

「はい」

「たどえぼくが、善鬼と//ワを結んだとしても?」

「運命に抗し得る限りは」

後ろからヘレナの肩を抱いた。その肌はひんやりとして、濡れた石のように滑らかだった。強く抱けば折れてしまいそうなほど、華奢な体。その奥に秘められた闇までも、ぼくは抱きしめようとした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1464z/>

六番めの善鬼

2012年1月5日23時48分発行